

1. テキスト

「内部知覚について」83 頁後ろから 2 行目から 87 頁後ろから 4 行目まで。

2. テキスト要約

「心理的自己」と「認識主観」は「知られる我」と「知る我」の違いである。それはまた「知識対象界」と「真の我」の違いである。「真に知る我」は「知識対象界を超越すると共に、又その中に於て働くものでなければならぬ」。すなわち両者の関係は超越と共に内在とすることができるであろう。さらにこの「真の我」は「全然個人を超越して何人の我でもない」「純粹我」のようなものではないとされる。ここを読むと「個人」は「知られる我」というように読める。次に「物が働く」ということを知るとは「自己が自己を自己の範疇に当てはめる」ことだとある。「物が働く」ことを知るとはもちろん「知識対象界」の話であり、それに「自己の範疇を当てはめる」ことにより、それは同時に自己の意識である。この時「自己」は「知られる我」になっている。「知る」ことにおいて「知る我」が同時に「知られる我」となっている。ここに西田は超越と内在の矛盾を見ているのではないだろうか。西田は「此には多くの矛盾を含んで居ると考えられるであろう。併しかかる矛盾なくして我々の自己の意識は成立し得ない」と述べている。この「自己の意識」すなわち「自覚」においては「何處までも現実的なものと、何處までも超越的なもの」が一つである。一般的なるものと特殊なるもの一つである」とされる。素直に読めば「現実的なもの」「特殊なるもの」が「知識対象界」にして「知られた我」「個人」の側に来る。これに対し「超越的なもの」「一般的なるもの」が「知る我」「真の我」の側に来る。

ところが「現在」が対象的には「達することのできない極限」であることによって読み方を変えなくてはならなくなる。すなわち達することのできない極限において転換が起こり、「真の我」が「現在」において「現実的なもの」であると同時に「超越的なもの」であり、「特殊なるもの」にして「一般的なるもの」であることになる。このことを西田は「達することのできない極限（現在：筆者）と考えられるものは、対象化することのできない自己の深い奥底に外ならない」と述べる。この「自己の深い奥底」が「一般的なるもの」である。これは『善の研究』で「一般的なるものは個体的実現の背後に於ける潜勢力」と言われ、『純粹経験に関する断章』で「ヘーゲルのダス・アルゲマイネー」と言われたものであろう。「現在」という極限が同時に「自己の深い奥底」であること、換言すれば特殊が一般であることの内にも西田は「背理」を見出して次のように言う。「背理の様ではあるが、自己は現在に於て自己自身と合一すると共に、自己を超越して居るのである」。そうして「果なき過去と未来とは、此の現在の自己の投げた影に過ぎない」と言う。過去も未来も現在の内に含まれており、これが現在が一般的なるものということの意味である。

テキストでは「時を一次元的なる直線の如きものに考え、現在を一点と考える」考えかたから出発して、最終的に「真の時」は「対象化せられた一線ではなくして、対象化することのできない主観の創造し行く跡形」であり、「真の現在とは、かかる創造の中心点」であることが明らかにされている。こうして「現在に於て種々なる『時』の世界が創造され、我々は現在から種々の世界に出入することができる」とされる。

こうした「創造的自己の立場」すなわち直観の立場から見れば「すべてが自己に対して現前している」。これは先に現在が「一般的なるもの」と呼ばれた事態である。アウグスチヌスが言ったように「過去、現在、未来の三つの時があるのでなく、唯現在あるのみ」ということになる。これに対し「経験的自己の立場」すなわち反省の立場から見れば、「自己は時の中に流れ行くもの」であり、「過去も未来も直接に知ることはできないばかりでなく」、「現在が瞬時も止まることなく流れ行く一点とすれば、捕捉すべからざるものは現在」ということになる。これでは自覚は成立しない（「自己が自己を省みることではできぬ」）。このような時を西田は「心理の時」と呼ぶ。

ところが「現在が捉え難く達すべからざる極限と考えられる時」、時は「感覺的对象」ではなく「思惟の対象」となっている。これを西田は「物理の時」と呼び、そうしてその

ような「思惟の対象界」を「高次的対象界」と呼ぶ。そして「矛盾は思惟すべきものを見ようとするところに潜んで居る」として、矛盾を「感覚の世界」と「思惟の世界」の間に認める。「而も此の解き難き矛盾が自己の存在である」とされる。そして「苟も私の自覚が許される以上、此両界が我に於て結合して居らなければならぬ」と述べる。この矛盾は反省と直観の矛盾であり、西田は自覚の成立の事実を根拠に両者の自己における同一を言おうとしており、基本的に従来「自覚」の立場を踏襲したものとなっている。しかし我々は西田と共にさらに深く「自覚」の事実を踏み入らなければならないだろう。

西田は我（真の我）を「鏡」に譬える。しかしそれは「何らの痕跡を残さぬ」ような鏡ではなく、自らを維持し、すべての映像を統一する鏡である。それでは「如何にして我が我自身を維持し、物の映像が我に於て互いに関係するのであるか」。

哲学的問い

「私は今何を見ているのか」